コラム　-「擬音語・擬態語」にはどんな種類がある？

https://pj.ninjal.ac.jp/archives/Onomatope/column/nihongo_1.html

「ごろごろ」「しんなり」などの言葉は，一般に「擬音語・擬態語」または，「擬声語・擬態語」とも呼ばれていますが，これらはそれぞれどう違うのでしょうか。また，日本語の「擬音語・擬態語」にはどんな種類があるでしょうか。「擬音語・擬態語」の呼び名や分類のし方については，これまで多くの研究者がいろいろな名前をつけたり，分類したりしてきましたが，ここでは，金田一(1978)によるものを紹介します。

金田一は，「擬音語・擬態語」を，その意味から細かく５つに分類して，以下のような名前をつけました。

まず，音を表すもののうち，人間や動物の声を表す「擬声語」と，自然界の音や物音を表す「擬音語」に分けました。次に，音ではなく何かの動きや様子を表すもののうち，無生物の状態を表すものを「擬態語」，生物の状態を表すものを「擬容語」とし，そして最後に人の心理状態や痛みなどの感覚を表すものを「擬情語」としました。以下がそれぞれの語例です。

「擬声語」：わんわん，こけこっこー，おぎゃー，げらげら，ぺちゃくちゃ等
「擬音語」：ざあざあ，がちゃん，ごろごろ，ばたーん，どんどん等
「擬態語」：きらきら，つるつる，さらっと，ぐちゃぐちゃ，どんより等
「擬容語」：うろうろ，ふらり，ぐんぐん，ばたばた，のろのろ，ぼうっと等
「擬情語」：いらいら，うっとり，どきり，ずきずき，しんみり，わくわく等

ここで，ある一つの語が，この５つの意味的な分類のうち２つ以上の意味分類にあてはまる場合があります。例えば「どんどん」というオノマトペは，「太鼓をどんどん叩く」というときには，太鼓という物の音を表す「擬音語」ですが，「日本語がどんどん上手になる」という文では，物事の様子を表す「擬態語」になります。また，「ごろごろ」という語は，この５つの意味的分類のすべてにあてはまる意味を持っています。例えば，「猫がごろごろのどをならす」は「擬声語」，「雷がごろごろ鳴る」は「擬音語」です。そして，「丸太がごろごろ転がる」と言えば「擬態語」ですが，「日曜日に家でごろごろしている」の

場合には「擬容語」になります。さらに「擬情語」としては，「目にゴミが入ってごろごろする」という用法もあります。このように，一つの語がたくさんの意味と用法を持つことがあるというのも，日本語の「擬音語・擬態語」の特徴だと言えます。

参考文献：金田一（1978）「擬音語・擬態語概説」浅野編『擬音語・擬態語辞典』所収角川書店